

編集室

* 編集特別幹事の最後の仕事として、90ページ近い30記事の「感性情報学」特集号の編集を終えて、ひとまず安堵している。

* 「Kansei」という言葉が、既に固有名詞として国際学界でも市民権を得ている中で、文系と理系との融合の白眉ともいえる感性情報学は、基礎・境界分野に最もふさわしいテーマであった。私自身も大変勉強になり、特にゲストエディターに加藤俊一先生をはじめ、感性に携わる様々な分野の専門家の皆様の「感性」と熱意には少なからず刺激を受けた。

* 現代科学技術の人間中心への回帰は、ますます加速すると思われる。しかしながら、今まで人文科学と呼ばれる分野と、いわゆる自然科学分野との融合は、思うほど簡単でないことも、今回の編集から感じられた。

* そもそも人文科学が、今まで自然科学と融合が難しかった理由を考えると、まずはその中に従来の「合理的学問体制」に収まらない異質な部分があるためであろう。一方、自然科学側の、他分野が数学化できなければ、Exact scienceとみなさず、従来の自分の学問範ちゅうに収まるように、厳密化を強いる姿勢も問題ではあるまいか。また個人的には、新しい学問対象に必要な新しい数学や理論武装の導入を怠りがちな理工系の惰性や怠慢もあるのではと思う。

* 真に新しい価値観と方法論そして道具を取り入れなければ、真のパラダイムシフトはあり得ない。同時に自分野にこだわらず学問体系を相対化して再構築する気概、異なる文化と価値観に対する謙虚な態度、そして住み慣れた世界から未知への冒険的精神も必要であろう。

* 思えば、2年間の任期中に、編集委員各自の専門分野が異なる基礎・境界グループの中で、委員の皆さんが力を合わせて仕事をしてきたことは実に異分野間協力の素晴らしい経験であった。支えて頂いた皆様に御礼を申し上げるとともに、今後の学会誌の発展を祈ってやまない。

(前編集特別幹事 趙 晋輝)

* 最近、デジタルサイネージという言葉をよく耳にするようになった。デジタルサイネージとは、屋外などでディスプレイなどの電子的な表示機器を使って、広告などの情報を発信するサービスである(デジタルサイネージコンソーシアムのHPより: <http://www.digital-signage.jp/>)。例えば、山手線の列車のドアの上にあるディスプレイで流されるメディアなどが典型的な例であろう。

* デジタルサイネージは、人を待っていたり、電車で移動中など、主に手持ちぶさたのときに目に触れることを想定している。そのようなときには、半ば無意識に情報を受け入れていることが多い。したがって、情報の露出を高めればそれなりの効果が見られるため、列車内のデジタルサイネージの広告枠については、昨今、非常に人気があると聞く。

* ところで、会誌は広く学会の会員の興味のあることをまとめるのが趣旨であるため、とかく読者の興味を絞り込むことが難しい。とすれば、例えばさっと斜め読みして頂き、そこから興味のある記事を見つけ出してもらって、しっかり読み込んでもらうというのがあるべき姿だろう。

* そのような会誌に目を通す受容者側のシチュエーションとは、どういうものであろう。デジタルサイネージが対象とするような手持ちぶさたの状況も多いのではないかとすると、デジタルサイネージとして会誌を表示することはできないとしても、デジタルサイネージの目指すところを編集に取り込むことは意味のあることだろう。

* デジタルサイネージのコンテンツは、短い映像の群であり、それを繰り返しアトラクティブに見せている。本会誌でも、表紙に主要目次を掲載したり、各記事の概要をキャッチフレーズとして目次に示したりしている。これらをより読者の目に付くようにするにはどうするか?例えば、IEEEの雑誌のように透明な封筒で配送し、受け取ったときに表紙が見えるようにするというのも、一案だろう。このような観点での本会誌の装丁等を見直す時期かもしれない。

(編集特別幹事 荒川賢一)